

京都部落問題 研究資料センター通信

第26号

発行日 2012年1月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告二〇一一年度部落史連続講座

当資料センター主催の「部落史連続講座パート2」を一月一日、一月二日、一月六日に京都府部落解放センターで開催しました。市民や教員など、毎回二〇名を越える参加がありました。

講演の要旨は次の通りです。

第1回

下村文六は京の弾左衛門か

はてなはてなの下村家

講師 辻三子子さん
(元京都文化短期大学教授)

江戸の弾左衛門は徳川氏の権力をバックにして、穢多頭弾左衛門と呼ばれ、皮作の仕事を中心に江戸の被差別の人びとと地域を明治になるまで統率していた。一方、京都では、「穢多頭下村文六」と幕末まで文書に書かれているが、実際には宝永五年（一七〇八）に文六が死去して下村家は断絶している。なぜ下村家が「穢多頭」とよばれたのかは史料がなく不明だが、下村家がどのような家だったのか、どうなっていたのかを今回は明らかにしたいと語られた。

幕府が治安維持を支配の要とするようになる中で、山水河原者の流れをひく下村家は幕府にとつて必要がなくなつていった。そのため、三代目文六が亡くなった時に断絶させられたと考えられる。「看聞御記」「蔭涼軒日録」「諸式留帳」などの史料を詳しく解説しながら、当時の被差別の村々の仕事・役目についても説明された。

第2回

京都の近代史における

朝鮮人労働者

山科地区を中心に

講師 高野 昭雄さん
(高校教員)

日本が朝鮮半島を植民地化した一九一〇年前後から日本での土木工事に朝鮮人労働者を使い始めている。そのきっかけは一九〇四年

から一九〇五年の朝鮮半島での鉄道工事で、日本の土木会社が現地で多くの朝鮮人労働者を使った経験による。

京都で朝鮮人労働者が従事した工事には、園部・綾部間の鉄道工事、宇治川水力発電所工事、第二疎水工事、東海道新線工事（新達坂山・東山トンネル工事）、京津国道改修工事などがある。

当時の新聞にでてる朝鮮人労働者の記事から、山科の北花山田町、日ノ岡堤谷町、御陵三蔵町などに戦前、朝鮮人労働者が多く集住していたことがわかる。特に北花山山田町は京都で最初にできた集住地で、最も長く続いた。

また、第二疎水工事（一九〇八年〜一九一二年）では、錦林部落の請負業者が朝鮮人労働者を使っていた。被差別部落の住民と朝鮮人が土木工事を通じて共に労働していた。

京都の近代化を支える工事に多くの朝鮮人労働者が従事していたことを、新聞記事や聞き取りなどの具体的な資料で詳しく説明された。

第3回

覚書・近代京都と屠場

三都の比較史

講師 吉村 智博さん

(大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員)

まず初めに、肉食が明治以降に始まったというイメージは作られたもので、古代から肉食は慣習化され、禁止は建前だけであつたということをもとに説明された。

京都では、一八七三（明治六）年に私設の屠場が西院村に開設され、その後京都市内や周辺農村に私設屠場が次々と開設される。

全国各地で乱立する私設の屠場を統制するため、国が一九〇六年に「屠場法」を制定して公営化が始まり、京都では一九〇九年に市立屠場が油小路十条にでき、現在の南区吉祥院の市場につながっていくということである。

この間の経緯で、被差別部落との関連を示す資料は殆どない。江戸時代にかわつた身分が担っていた皮革業、斃牛馬処理がそのまま近代の屠場に移行したと考えられがちであるが、直接つなげて考えることはできないということであつた。しかし、屠場での儲けは行政や民間資本に流れ、屠畜・皮に対する差別の視線は被差別部落に向かうという現実をどうとらえるのか、この「からくり」をしつかり研究することの必要性を訴えられた。

本の紹介

三山喬著 『ホームレス歌人のいた冬』

渡辺 毅

（東九条マダダ事務局長）

（柔らかな時計）を持ちて炊き出しのカレーの列に二時間並ぶと雑煮の椀を手に持つ人ら

試みに二つの歌を並べてみた。

どちらも炊き出しを詠んだものが、作者は同じではない。一首目は二〇〇八年十二月八日付「朝日歌壇」に初入選した「公田耕一」の作。（柔らかな時計）は、スペインの画家、サルバドル・ダリが『記憶の固執』の中に描いた歪んだ時計のことらしい。一皿のカレーを得るためだけに炊き出しの列に並ぶ延々たる二時間は、作者にとつて、通常の時計が刻む時間とは別のものに感じられたのであろう。

二名の選者がこの歌を選んだ。入選すること自体が至難とされる「朝日歌壇」で、これは一つの快挙である。だが、それ以上に多くの読者がまず目を瞠つたのは、公田耕一と称する投稿者が住所欄に

記した一言であつた。通常なら「東京都」「京都市」などあるところ、公田は己が居所を「ホームレス」としていたのである。こうして「朝日歌壇」に突如出現した「ホームレス歌人・公田耕一」

の歌は、以降九ヶ月間にわたり異例の高確率で入選を繰り返す。読者・投稿者の間に公田の存在は大反響を呼び、翌々週に入選した「炊き出しに並ぶ歌あり住所欄（ホームレス）とありて寒き日」という大阪在住投稿者の一首を皮切りに、ホームレス歌人への相聞歌めいた歌も、その後続々と生まれていく。

マスコミも動いた。投稿葉書の消印や歌の内容から、公田が横浜のドヤ街・寿あたりにいるのは明らかだった。週刊誌やテレビが取材に乗り出したが、行方は杳として知れず、公田耕一は実在しないとか、ホームレスというのは詐称に違いないとかの説も流布し、やがて初入選から九ヶ月後、「朝日

歌壇」への公田の投稿はぱったりと途絶える。

『ホームレス歌人のいた冬』は、公田自身の投稿が途絶えた後も、時折「朝日歌壇」の紙面には公田を想う歌が載る、そんな時分に始まった、公田耕一捜しの物語である。著者の三山喬は四十代後半のルポライター。フリーランスの境遇に行き詰まりを覚え、もはや潰しのきかぬ年齢で将来に対し不安を抱く中、ホームレス歌人・公田耕一の存在に強く惹かれた。公表されている公田の三十数首の歌を手がかりに、三山は、不況と高齢化に沈淪する寿の街に足を踏み入れる。

さて、ここから私も本書の中身に足を踏み入れていくべきところだが、そう云えば冒頭に、公田の作ではないもう一首を掲げていたのであつた。忘れていたわけではない。忘れたふりしてほつたらかにしておいてもよかったのだが、そうもいくまい。冒頭の二首のうち、二首目はというと、これは誰あるう私自身の作である。七年前の冬に詠んだ。

或る短歌結社に所属してこつと歌を詠み、かれこれ四半世紀になる。何しろ長く続けているから、その間にいわゆる「ホームレ

「ス」を詠んだ歌も幾首があり、これはそのうちの一つ。或る公園での真冬の炊き出し風景を詠んだのである。詠み手の私は、炊き出しの列の外側にいる。私はかつて歌誌に、自らの作歌姿勢について以下のように記したことがある。

「人間というものの、あるいはこの地上のいろんな生きものたちの営みの断片を探している。断片は刹那的なものであっても、そこに人や生きものたちの、それぞれの生の長い時間の果ての、切ないような可笑しいような、ドラマがある。そんなドラマを、それなりに目や耳を研ぎ澄ましては切り取り、三十一文字前後の歌にする」。冒頭の炊き出しの歌は、こうした作歌姿勢に則って詠んだ。列の外側にいてこそ詠める歌。列の中にいる公田の歌とは、そこが大いに違うのだが。

だが、と私は今、思っている。私は本当のところ、列の外側の人間なのである。今の私は、あの歌を詠んだ七年前ほどには、列に並ぶ人たちとの距離を感じない。雑煮の椀を手にして並ぶ列の中にいる自分、柔らかな時計の時間を延々とやり過ごす自分を、今の私は想像できる。あの歌を「炊き出しに降る糠雨を受くこと雑煮の

椀は吾の手にもあり」などと推敲する日が、必ずしもないとはいえないような気もする。

なぜこんなしみたれたことをあえて綴るのかと云えば、要するに私は本書を、いたく共感しながら読んだのである。公田や、著者が取材で出会ったホームレスの幾人かにも折々共感を覚えたいではなかったけれども、それは三山の彼らに対する共感を私も共有するといったていの、共感の三段論法みたいなもので、何と云っても著者の三山その人に共感を抱かずにはいられなかったのである。

私は三山と同様、もはや潰しのきかない年齢にあることを自覚しており、昨今は夢や希望を凌駕する蹉跎感に囚われてしまうことも少なくない、彼とほぼ同世代の人間なのである。だからか、三山が時には自分と生き写しであるかのような錯覚を感じながら読んだのである。そもそも三山も、公田を捜して彷徨いながら、ホームレス歌人と己れとが二重写しになるのを時に禁じ得ない。短歌を詠みながら寿の街のどこかに隠棲する公田と、行く末に不安な絶望を感じながらペンにすがるしかないルポライターの自分。

あるいは或る時、公田その人で

はないかと狙いを定めて取材した老人がいた。あては外れたが、老人から話を聴く機会を得た。老人はかつて政治の世界に挑み、しくじり、多額の借金を作り、家族からも流離して、ホームレスになったのである。傍目に見て再起の可能性は絶無と思われるのに、本人は楽天的であり、今は一時的な試練の時に過ぎない、と思いつ込んでいる。このインテリのなれの果てには、社会の右肩上がりの成長を疑わず育つた或る世代、或る階層に属する人間に染みついた「甘さ」があり、この「甘さ」は自分にも共通のものだ、と三山は思うのである。

こうして、時には公田捜しという本来の目的など二の次にして、己れ自身の不安と向き合う。云ってみれば、炊き出しの列の外側から列を眺めていながら、列に並ぶ自分を思っただけのりである。そういうところが、本書にえも云われぬ魅力を与えている。少なくとも、三山にどっぶり共感できずしてしまふ私からすれば、これは魅力である。七年前に炊き出しの歌を詠んだころの私であれば、気づかなかつたかもしれない魅力。

おそらく、そんな三山に共感する人は、思いのほか多いのではな

かるうか。時代の逼塞感、などと云ってしまえば端的に過ぎるかもしれないが、そういうこともあるであろう。うらぶれた自分の姿なんて数年前までは想像もしなかったのに、今では三山のメンタリティに近親感を覚えるほどに、うらぶれた己れを自覚したり予感したりできる、そんな人が私だけでなくわりといそうな気がする。

共感とはともすれば、見たくない己れの現実を、他者の中に見せつけられること。私が三山の不安に共感するのは、私自身の不安があからさまに剥り出されることなのである。だが、嫌な感じはしない。それはなぜかと云えば、三山が彷徨い捜しているものが、じつのところは公田耕一であるよりも、或る種の希望、なのだということにこそ、ひしひしと共感を覚えるからにはかなるまい。

不安や絶望と隣り合わせで生きていかざるを得ない人間にこそまつことのできる希望、そういう希望を、三山は捜し、彷徨う。三山は、存在非存在の定かならぬ公田耕一という歌詠みに、希望、を感じたのである。それで捜し始めたのである。捜す営みこそが彼本人にとつては重要で、もちろん彼はプロのルポライターである以上、

それなりに段取りしながら、当初の目的である公田耕一の実存を把握するための作業を怠りなく積み重ねていきはするのだけれども、本当は途中から、公田が見つかるかどうかなんてことはどうでもよくなっているのである。本書をホームレス歌人発見譚と信じてこれから読もうとする方には、こんなこと暴露すべきじゃないかされないが、実際、結局のところ、公田耕一その人はついに見つからない。そして、見つからなかったがそれはそれで一向に構わない、という私の読後感は、たぶん本書を読んだ大半の人の読後感と共通するものであると思う。

三山が、相変わらず不安や絶望と有縁の存在でありながら、不首尾に終わった公田捜しを経て、或種の希望をもち続けることへの確信に到った、それだけで十分なのである。その希望は、私たち（三山同様日々不安やもすれば絶望に囚われがちな）もまた、もつことができる。つまり本書は、私たちへの応援歌みたいなものもある。諧調はうらぶれているがうらぶれた調子の応援歌があってもいい。してみると、本書は『ホームレス歌人のいた冬』とタイトルが付いているが、じつは三山喬物が

語なのだという気がしてくる。しかし待て。公田耕一なくして三山喬物語なし、なのではないか。であるからにはもう少し公田にも眼差しを向けねばなるまい。

パンのみで生きるにあらず配給のパンのみにて一日生きる
温かき缶コーヒーを抱きて寝て
覚めれば冷えしコーヒー啜る

いずれも公田耕一の作。三十数首の中で私が佳いと思った二首である。口語と文語が混在しているが、ここでは気にならない。一首目には、きれいごとに生活感をこめた語呂合わせで切り返す諧謔味がある。二首目は、下の句を「覚むれば冷めし」などとしてみてはどうかなんて、つい添削してみたくなりながら、一夜の時間の推移を温度感覚に置き換える感性は、このままで十分に面白い。

三山喬を介在させず公田耕一の歌そのものと向き合いかけて、ああそうか、と気づくのは、さつきは確か、私が公田に共感するのは三山の公田への共感を共有するということの共感の三段論法みたいなもの、などと記したけれども、三山を介在させず公田にダイレクトに共感

ないし近親感を覚えるところもある。だって公田と私はどちらも歌詠みだから。三山を抜きにして公田と歌について語り合いたい気持ちさえよぎるが、この稿は公田の歌の歌評でなく『ホームレス歌人のいた冬』という三山喬物語の書評だということ思い出した。やっぱり三山を抜きにするのはよそう。三山が、公田捜しの手がかりにした歌は以下のようなものであった。

「親不孝通りと言へど親もなく
親にもなれずただ立ち尽くす」
（親不孝通りという古い通り名を知っているからには、横浜近辺の出身者か）。「雨降れば水槽の底にある如く図書館の地下でミステリー読む」（水槽の底にいと感じられる造りの図書館と云えば中央図書館。そこに出入りするホームレスを当たればあるいは…）。
「日産をリストラになり流れ来た
ブラジル人と隣りて眠る」（他人を詠まない公田が、このブラジル人のことは二首詠んでいる。彼を捜し出せば公田情報を得られるのでは…）。「胸を病み医療保護受けドヤ街の柩のやうな一室に居る」（路上生活していた公田が、或る時からドヤで暮らすようになった。医療保護受給者の線から当たっ

てみようか。)

こうした手がかりに従って、三山は寿の街をさすらう。ホームレス支援団体にも出入りし、ここで公田を名乗る人物から電話があったと聞き、キミダかコウダかと思っていた公田が、じつは「クデン」だと知る。そして横浜市南部に公田町なる地名があることに気づき、もしかして公田耕一は、公田町に戦後建ち並んだ団地で育った団塊の世代の人なのでは、と想像したりもする。公田の歌にグレコの歌、ダリの絵、塚本邦雄の歌集の題だとかが登場することから、教養人に違いないとは従前から憶測されていたのであるが、そうした教養のありそうなホームレスを捜し歩くうちに、古本集めをしている或る男が「一日を歩いて暮らすわが身には雨はしたたか無援にも降る」という歌を見て、「『無援にも』というのが、本を詰めた袋を抱えてびしょ濡れになる感じだと、よけいびつたりくる」と指摘し、「あの人ではないか」と云うので、古本集めしているインテリっぽい老人に狙いを定めて接近してみたところ、それは先述の、かつて政治に志した老人であったりもした。

公田捜しの過程を辿りながらドヤ街・寿の街の現況を描くあたり

は、さすがにルポライターの仕事であるが、しかし結局のところ、公田耕一は見つからない。三山自身も、それで仕方ないと諦め、むしろ見つからなくてよかったとも思っている。無責任みたいだが、先にも触れたように、三山の公田捜しは、希望、を求めている彷徨だったのだから、公田発見の成否は、じつはどうでもいいのである。では、三山喬が公田耕一なるホームレス歌人に感じ、捜し求め、彷徨の末に改めてかみしめた、希望、とは何か。

それは一言で云えば「表現すること」なのである。いかなる境涯に立ち至ろうとも短歌という表現手段を持っている公田耕一は、幸いなるかな。「表現すること」が希望であるとひしひしと感じながら、三山は、公田への相聞歌めいた歌を詠んだ各地の投稿者への取材を通して、または、彷徨の途中で立ち寄った識字教室でも、そのことを確認し、確信し、そうして自身の、希望、をかみしめたのである。自分にもルポライターとして「表現すること」がある。これを希望として、もう少し踏ん張ってみよう、と。

私は三山の、希望、に共感する。「表現すること」は私にとって

希望。それは同時に公田に対する三山を抜きにしたダイレクトな共感でもある。公田と私との間にある共感、三山には申し訳ないが「表現すること」なんて漠たるものではない。歌詠み同士だから通じ合える、短歌という希望そのものの。

瓢箪の鉢植えを売る店先に軽風
立てば瓢箪揺れる

公田耕一の、「朝日歌壇」最後の入選作である。公田はこの一首で、己れが「ホームレス」などと冠することを要さない一介の歌詠みであることを宣言したのだと思う。そして飄然と世上から姿をくぐりました。歌は、「ホームレス」であるなしかかわらず、歌詠みとしての公田耕一の希望そのもの、ああ、いつしか私にとっても、歌はそのようなものになりつつある気がしてきて、主人公・三山を尻目に、公田に返歌を贈りたくなつた。

熟柿ひとつ枝に残され落ちさう
に軽風立たばと待つ冬の空

(東海教育研究所刊、二〇一一年三月
一八九〇円)

本の紹介

片岡優子著 『原胤昭の生涯と事業』

田中 和男

(龍谷大学非常勤講師)

大森義太郎は昭和初期の共産党弾圧事件、三・一五事件と関連して東京帝国大学助教を辞任させられたマルクス主義の経済学者としてよく知られている。義太郎の子・大森映による評伝『労農派の昭和史 大森義太郎の生涯』(三樹書房、一九八九年)では、権力と抗い、左翼運動でも主流である講座派に抵抗した大森を「反骨血筋を引く」人物として描き出している。大森が東大助教を辞任したとき「やつぱり、おじいさんの血は争えない」と母親がつぶやいたという。大森の祖父が原胤昭であった。大森義太郎にくらべて、原胤昭の生涯や思想については一般的には知られていないし、関心が大きいわけではない。大森映の評伝には原の反骨ぶりや生涯が簡明にまとめられているので、その一部を用いて原胤昭の一生を紹介しておく。

「原は江戸・八丁堀の与力に生

まれ、少年時代、跡を継いだ、御一新で幕府が崩壊すると、どういふ動機か分らぬが、米人宣教師カローザスの洗礼を受けてクリスチャンとなった。……文書伝道のため十字屋……を創め、続いて神田須田町に絵草紙屋を開く」ことになった。自由民権運動が高まり政府の弾圧が激しくなると、「眠っていた反骨精神を起こした原は商売ものの絵草紙を使つて一矢むくいることを思いついた」。版画家の小林清親に「自由民権志士の絵姿をかかせ、自分が戯言のような文章を書き、『天福六家選』と名づけて売り出した」。その結果、原は新聞紙条例で拘引され、石川島監獄へ入獄させられた。「当時の石川島監獄は地獄部屋さながらで、凄惨な体験をした原は出獄後、受刑者を護るため教誨師となり、さらに出獄者の更生をはかる免囚事業を始めて一生を終えた」(八一―八三頁)。

大森の母は原胤昭の長女百合であり、紀州徳川家の下級士族出身で日本郵船社員であった大森啓助と結婚した。啓助の父もキリスト教に影響を受けていた。キリスト教と社会活動の影響と思われるのは、義太郎の妹・山本松代は、戦前には東京YMCA職員として教育に係わりアメリカに留学したが、戦後農林省生活改善課長として新生活運動に取り組んだ。末弟は牧師になったという(片倉和人、生活改善普及事業の思想 山本松代とブラグマティズム 田中宣一編『暮らしの革命』農山漁村文化協会、二〇一一年)。

大森映の紹介では「免囚事業を始めて一生を終えた」と一言で片付けられている原胤昭の生涯を、家職である幕府与力という出自の問題、キリスト教への入信の動機、さらになぜ出獄者の更生を志し、いかに実践したのか、また半官製組織である中央慈善協会、東京府慈善協会での活動など、原の生涯と福祉実践の全体像を、同時代の資料と原自身の論文・回顧を渉猟して描き出そうとしたのが片岡優子さんの大著『原胤昭の研究』である。

学を学び、同大学院と関西学院大学大学院博士課程で原胤昭研究を深められた。本書はその博士論文として提出されたものをまとめたものであるという。出版については社会事業史学会により刊行費助成を受けている。文献目録、索引を含めて約四〇〇頁の大著である。社会福祉の歴史の分野でも個人の実践・活動を対象を絞った研究が活発であり、先駆者の顕彰ではなく客観的な検証の段階に入ってきている。室田保夫著『留岡幸助の研究』、教育史からは二井仁美著『留岡幸助と家庭学校』など業績が積み重ねられてきている。財界人でもある渋沢栄一についても社会福祉にテーマを絞った大竹まこと『渋沢栄一の社会福祉思想』が出版されている。北京に女子養育施設(崇貞学園)を開設した清水安三については福祉史の観点からではないが太田哲男著『清水安三と中国』が書かれている。そうした中で、比較的地味な免囚保護の分野の先駆者に当たる原胤昭の実像を福祉史の中で明確にしようとする本書が出現したことは、なにはともあれ喜ばしいことではある。

う司法福祉の分野に止まらず、全国の慈善事業施設の実態を調査した報告書の作成、東京の細民地区改善事業への関与など貧困・部落問題に係っていた。社会事業と融和・部落問題にわたる活動をしたことも興味深い。

本書の構成を簡単に見ておこう。序章で原胤昭についての先行研究の不備、とりわけ資料的な曖昧さが存在することを指摘して、原の監獄改良から免囚保護事業への変遷と意義を新資料の発掘により証明するという課題を明確にする。

第1章から本論に入り、ペリー来航の一八五三年、町奉行所与力佐久間家に生まれた胤昭が母の実家で同職の与力を務める原家に養子となつた経緯、家職の意義が述べられている。徳川家の家臣であり犯罪に係る家職が原の天職を方向づけたことが示唆される。第2章で幕府の崩壊の後、キリスト教(長老派)の洗礼を受けたこと、このキリスト教の信仰も原の生涯を決定づけた。前述の大森映が紹介したように自由民権と関連して新聞紙条例違反で捕らえられた経験が、監獄改良・出獄人保護への道を決定した。第3・4章では兵庫仮留監・北海道集治監での教誨

師としての原の実践と思想が語られる。神戸時代ではアメリカン・ボード(同志社派)の宣教医・JCペリーとの関係を述べ教誨方法として「カード」方式を用いたことが紹介される。北海道時代には「鎖塚」に象徴される囚人労働に対する原の批判、同じ監獄改良を志す留岡との邂逅、真宗派教誨師の宗派的教誨に対して、原は道義的教誨を重視し、両派の争いの結果キリスト教派の連袂辞職に至つたことが確認される。

第5・6章では、一八九七年に創設された東京出獄人保護所での援助方法、財政状態などが大正期の時期までを含めて検討される。第7章では一九〇〇年の内務官僚を中心にした組織された貧民研究会から〇八年中央慈善協会の組織化、協会幹事として機関誌『慈善』を編集した時期が取り上げられる。同協会は内務省細民調査に關与し、原も幹事として全国の福祉施設を訪問し『全国慈善事業報告書』をまとめた。第8章では、石井十次との出会いの後、岡山孤児院東京地方委員として孤児救済事業に原が係るだけではなく、児童虐待問題にも深く関与したことが新資料を用いて解明される。第9章では、

東京府慈善協会の活動と原との関係が究明される。原は一九一七年、中央慈善協会幹事を辞任するとほぼ同時に、東京府慈善協会の設立に關与する。その独自の事業として救済委員の設立、「細民地区改善事業」が挙げられる。第10章では、一九四二年の死に至る昭和期の原の動向が付け加えられている。最後の「結びにかえて」で、本書を概観し、原の前半生の分析に關しては回顧録などに依存せざるを得なかつたなどの問題点と、本書でなされたのは原の事業の「基礎的な部分」の解明に過ぎないことが控えめに語られている。残された課題として、小河滋次郎との係わり、原自身の思想、信仰の内容などを明確に示すことなどが例示されている。

片岡さんは、原が監獄改良と出獄人保護を終生の仕事として選んだ契機として、幕臣としての出資や与力という家職とキリスト教の信仰に特に注目している。出自の問題と、武士としての家庭教育がキリスト教入信にも関係していることを述べている。江戸の治安・犯罪防止に係る家職である与力は原を監獄改良への関心と結びつきやすくしたことは確かであろう。

しかし、これは後知恵ではないか考えられる。出獄人保護を一生の仕事として選んだ後に振り返るとそう言えても、与力としての経験が直接の原因となつて監獄改良の道を選んだと言えるのか。明治維新で一五歳という年齢的にいつても原に家職の意義が自覚されたとは思われない。

このあたりは、片岡さんも自覚しているように、若い時代の原については回顧を資料にせざるを得ないという限界がある。しかし、資料的限界以上に、問題は方法的なものでもあろう。片岡さんは与力の内実の説明にも多くを原の回顧に依拠している。しかし、原の証言とは異なる武士や与力の実態を考へることはできないのだから。原という一九世紀後半から二〇世紀を生きた個人の実践と思想を分析するためには、彼/彼女が生きた時代・状況に対してのもう少し広い関心が、研究者には必要であると思われる。

例示される「粹でかためた八丁堀の旦那衆」である与力が華美でアウトロー的な存在と見なされなかつたわけではないし、「町人に近い武士」である与力としての原が「社会的弱者への共感」を持つ

ていたとしても、「公儀の威光」をかさにきて「非人」を含む捕り方を使って犯罪人を捕まえる権力的な役割を町奉行所の与力・同心はもつた。武士・幕臣の中でも排除されがちな「旗本御家人の下位に座した小吏」(二五頁所引の原の言葉)としての与力という被差別意識が原に犯罪者への共感を育んだのかも知れない。江戸には町人以外の裏長屋の住民があり、さらに非人・無宿が生活した。留岡幸助が非行少年の更生問題に關心を持つ契機は商人の子として生きる被差別意識であつた(と後に語っている)。

原家の祖先と挙げられる千葉氏が源頼朝と対等な武士としての威光を持っていたのと、与力としての原家が幕府の旗本・御家人として武士意識を伝承しようとしたのとは武士とはいつても、全然、異なっているように思える。徳川家の家僕としての武士意識が、維新の後、新政府の官吏にスムーズに転換したのか。その辺の説明は少ない。

原が終世、キリスト者だつたことは確かであろう。片岡さんの大著を以てしても、その入信の動機は明確ではない。経緯は書かれて

いる。動機としても回顧の引用で原家に養子になる前の「家庭の訓育」で「欧米先進国の文化が基督教に胎胚」していると考えられたことが「キリスト教を受容するための素地」になつたことが指摘される。西洋の文明化の基盤にキリスト教があるとするのは、開国派の幕臣・福沢諭吉の文明論であるだけではなく、尊王敬幕を訴える水戸学派の会沢安『新論』の認識でもあつたから、この言説自体に不可解さはない。福沢は幕藩時代の門閥制度を批判するだけではなく、キリスト教にも距離をとつた。会沢は民衆をたぶらかすキリスト教を排除する。原のほうは、幕府の武士・与力としての意識は保持しながら、キリスト教にも接近したと評価する。原にとつては信仰よりも、文明化の効果に対する期待であつたのだろうか。そうすると、キリスト教に基づく監獄改良・出獄人保護も日本の文明化に係ると理解されるだろう。しかし、そのうとは言えないらしい。キリスト教の信仰によつて、「神の前に人はみな平等であるという人間観」を学び、「信仰に基づく人道的な愛と、キリスト者としての自由」が明治初期にキリスト教に入信し

実際の活動を方向づけたという(八三頁)。

与力という家職、キリスト教の平等観も原が天職として監獄改良・出獄人保護の道を選ぶための決定的な契機ではなく、錦絵の発行によって原が出版条例・新聞紙条例違反で一八八三年に禁固三か月罰金三〇円の判決を受け、原が与力時代に見回り役をした人足寄場を改築した石川島監獄に収監される経験が必要であった。在監中に「受刑者たちに福音をつたえた経験」が教誨師就任の契機となり、受刑者として教誨師として監獄の悲惨な状況を体験・実見したことが監獄改良と出獄人保護の必要を自覚させた。しかし、片岡さんによれば、教誨師として受刑者に伝えようとしたのは、キリスト教という宗派に偏った宗教的教義ではなく、受刑者が良民として立ち直るための「道義的教誨」であったという。この立場から、宗派的な教誨を主張する浄土真宗派の教誨師と対立し、キリスト教派教誨師の連袂辞職に帰結する。宗派を擁護できない受刑者の信教の自由を保障するためには、宗派の偏らな「道義的教誨」に止まる必要がある、という主張は一理ある。し

かし、キリストの福音をつたえる行為は十分宗派的だと思われる。さらに国家の手によって道義的教誨を与えることは、受刑者個人の信教・信条の自由の境界に踏み込むことにはならないのだろうか。

原の国家・政治観について、さらに社会観についても本書の言及は少ない。原の活動、生涯の一貫した性格として、原の在野性、国家・政治から距離を置いた生き方が記されている。キリスト者としての自由、信教・言論の自由の主張を片岡さんが評価するのも、その表れであろう。原は自らの出獄人保護事業を私的なものであることにこだわり、官公庁からの助成金を拒否し、犯罪者への懲戒主義を重視する司法省とは一線を画した。しかし一九二二年司法省保護課長に宮城長五郎が就任して、原の教化主義を採用したため、「原と司法省との確執は過去のもの」となったという(三四三頁)。原が一般的には官製団体と見做される中央慈善協会に関与したのも、一九一七年に至るまで民間の私設団体とみなされていたから(二五三頁など)、一七年以降、東京府慈善協会に関与するのも、それが自主的な団体といえなくとも「東京府

と連携して」府民のために貧困・障害への支援を行ったことにあるとしている(三三三頁)。

東京府慈善協会は「貧困を個人の怠惰の結果と把握せずに、『細民』を社会組織の欠陥により生じた人々として捉えた」という(同頁)。協会に積極的に関与した原も同様の視座を共有したと思われる。しかし、どういふ社会組織の欠陥が貧困をもたらすかという点の議論の追求は、本書では不十分と思われる。原自身に社会に関する議論が欠如するのか、片岡さん自身にその問題意識がないのか、は分らない。教誨師就任以来、出獄人保護の実践で原が先駆的に行ったと著者が評価する個人別の「カード」の記録がその本人の社会的基盤を追求するものであったのかも気にかかる点である。中央慈善協会、東京府慈善協会のメンバーとして原が行った細民・細民地区に関しても、貧困者一般なのか、「細民部落」という表現にあるように被差別部落の問題が示唆されていると考えてよいのかも明らかにしてほしかった。

原胤昭の孫である大森義太郎は、共産党の関係者として東大助教の辞任に追い込まれる。この時点

で大森は逮捕されたわけではないから、直接的な政治弾圧といえないかもしれない。しかし、昭和前期の戦争体制への道を象徴する事件となった。実際、三七年末には大森は人民戦線事件の関係で検挙され、三九年に保釈される。自分の孫が巻き込まれたこれら一連の事件を原はどのように見ていたのか。政治的犯罪者は予備軍を含めて司法観察制度が導入されていく。原が始めた免囚事業の質的転換が行われていく。教化主義により犯罪者やその予備軍を愛撫指導することまで原は肯定的に考えたのか。

一九四二年二月二三日に原は死去した。死の前に、世話をした出獄人の保護カードを消却するよう遺言した。釈放者第一主義であるという。この二月はちょうどその没後七〇年に当たる。本書の出版も時期を得たといえる。原が課題とした受刑者の出所後の処遇や児童虐待問題は現在でも重要である。原の生涯と事業を、彼が行った福祉実践の方法を明確にするだけではなく、社会的な文脈の中で読み直されることが一般の読者にとっては必要だと思つた。

(関西学院大学出版会刊、二〇一一年一月、七二四〇円)

部落解放 654号（解放出版社刊，2011.12）：630円

特集 部落問題と向きあう若者たち 4

本の紹介

『いつか見た青い空』（りさり著）／『はじめて出会う生命倫理』（玉井真理子，大谷いづみ編）／『シティズンシップへの教育』（中山あおい，石川聡子，森実，森田英嗣，鈴木真由子，園田雅春著）／『ルボ下北核半島 原発と基地と人々』（鎌田慧，斉藤光政著）／『人権という幻 対話と尊厳の憲法学』（遠藤比呂通著）／『「共に学ぶ」教育のいくさ場 北村小夜の日教組教研・半世紀』（志澤佐夜編）

教育行政改変の動向 いま大阪で起きていること 上杉孝實

共催展「親鸞と被差別民衆」 親鸞を通して浄土真宗の部落問題とのかかわりをたどる 宇野哲哉

まちかどの芸能史 11 軽業 村上紀夫

部落解放研究 193（部落解放・人権研究所刊，2011.11）：1,400円

特集 1 人権教育・啓発「基本計画」の全面改定構想

人権教育・啓発に関する基本計画改定の課題 上杉孝實／「普遍的な視点」と「個別的な視点」の統合 平沢安政／人権教育・啓発基本計画改定の視点 阿久澤麻理子／子どもの人権保障の視点から見た人権教育・啓発基本計画 住友剛

特集 2 震災と人権

東日本大震災における災害ボランティア活動が拓く可能性 渥美公秀／人権のまちづくりから見た復興支援の現状と課題 寺川政司／震災・学校支援チーム（EARTH）の活動 泉雄一郎

これからの人権教育・啓発の課題は何か 近年の地方自治体における人権意識調査結果から 神原文子

フランス都市社会政策と社会的不利地区 川野英二

反差別国際運動インターン報告 人種差別撤廃委員会第78会期と国連人権理事会第16会期に参加して 大城尚子
部落解放研究くまもと 62号（熊本県部落解放研究会刊，2011.10）

特集 部落史編纂の意義と課題

部落史編纂の意義と課題 大阪の部落史編纂の反省から 中尾健次

映画「新・あつい壁」制作と人権 齊藤真

「水俣病」差別発言を考える 田中睦

今日の部落差別と解放運動の課題によせて 花田昌宣

「熊本の被差別部落史 前近代」編さん委員会報告 第1回編さん委員会開催 編さん組織の立ち上げ、編さん計画の策定

本の紹介 黒川みどり『描かれた被差別部落』 杉本学

部落問題研究 198（部落問題研究所刊，2011.9）：1,111円

若者を対象とする社会教育職員（コースワーカー）の専門性に関する一考察 イギリスYMCAジョージウィリアムスカレッジによる基礎学位コースを中心に 立石麻衣子

『部落問題解決過程の研究』（第1巻歴史篇）をめぐる 山田敬男

「研究の足跡」その2 脇田修氏、脇田晴子氏と部落問題研究

史料紹介 北原泰作文書（その6）部落解放全国委員会関係史料（その2） 西尾泰広

ライツ 149（鳥取市人権情報センター刊，2011.10）

今月のいちおし!! 『ゴールデンランバー』（伊坂幸太郎著） 田川朋博

ライツ 150（鳥取市人権情報センター刊，2011.11）

今月のいちおし!! 『差別語 不快語』（小林健治著） 川上学

リベラシオン 143（福岡県人権研究所刊，2011.9）：1,000円

特集 『企同推』とは何か

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 9 前野良沢の長崎留学 福岡藩の蘭学と解剖 2 石瀧豊美

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 5 『全九州水平社史料集（仮）』草稿より 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

精一杯生きてきた 宮本秀雄さんに訊く 4 川向秀武

資料紹介 生活の柄 61 『近世民衆史の泉』改め 竹森健二郎

歌に見る歴史 『奇妙な果実』（アメリカ） 船津建

ルシファー 14（水平社博物館刊，2011.10）

公開講座報告

「『大逆事件』と熊野・新宮グループ」 辻本雄一／

「コリアと日本 『韓国併合』から100年」 関連事業 掖上小学校・夜間中学交流会 申順連／全国水平社創立の源流 部落改善運動・融和運動と水平運動 本郷浩二

- ちくま 485 (筑摩書房刊, 2011.8) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 51 第11章 1927年の「日本問題に関する決議」3 沖浦和光
- ちくま 486 (筑摩書房刊, 2011.9) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 52 第12章 地下より浮上した革命運動 1 沖浦和光
- ちくま 487 (筑摩書房刊, 2011.10) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 53 第12章 地下より浮上した革命運動 2 沖浦和光
- ちくま 488 (筑摩書房刊, 2011.11) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 54 第12章 地下より浮上した革命運動 3 沖浦和光
- ちくま 489 (筑摩書房刊, 2011.12) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 55 第13章 転向の時代 1 沖浦和光
- であい 594 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.9) : 150円
 子どもの貧困と学校の役割～「反貧困学習」4年目を迎えて 肥下彰男
- 人権のまちをゆく 57 渋染一揆フィールドワーク 子どもたちと学びたい反差別の生き方
- 人権文化を拓く 170 あの時何ができたのか。～隣町からの被災地支援～ 菅原慶子
- であい 595 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.10) : 150円
 人権のまちをゆく 58 湊川を歩き、阪神・淡路大震災に学ぶ
- 人権文化を拓く 171 わたしらのこと、忘れんといて下さいな 小川秀幸
- であい 596 (全国人権教育研究協議会刊, 2011.11) : 150円
 人権のまちをゆく 59 文化と人権の街 新宮市
- 人権文化を拓く 172 原発は差別で動く 西村秀樹
- 同志社政策研究 5号 (同志社大学政策学会編, 2011.3)
 北岡壽逸の社会政策論 出生政策を中心に 杉田菜穂
- ねっとわーく京都 274 (ねっとわーく京都21刊, 2011.11) : 500円
 戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか 元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 1
- ねっとわーく京都 275 (ねっとわーく京都21刊, 2011.12) : 500円
 戦後半世紀の京都市行政は私たちに何を伝え、何を残したのか 元京都市経済局長清水武彦さんに聞く 2
- 花園大学人権教育センター報 39号 (花園大学人権教育研究センター刊, 2011.12)
- 奈良・水平社博物館<春季フィールドワーク>報告
 水平社博物館～人権のふるさとを訪ねる～ 合田千景 / 改めて思う仏教と部落問題 中尾良信 / 医療政策とのクロスオーバー 藤井渉 / 水平への眼差し～passion 受難と情熱～ 宮西優誌 / 「平等」について少し考えてみました。 室津龍之介 / 水平社博物館を訪ねて 森本泰弘 / 全水90周年を前に感じたこと 八木晃介
- ヒューマンJournal 198号 (自由同和会中央本部刊, 2011.9) : 500円
 部落解放運動40年を振り返って その理論と実践 1 灘本昌久
- ヒューマンライツ 283 (部落解放・人権研究所刊, 2011.10) : 525円
 ジェンダーで考える教育の現在 52 大学教育と人権尊重の視点 京都教育大学「性暴力」事件判決を考える 木村涼子
- 朝鮮王朝時代における「白丁」研究と私 徐知延
 なぜ私は平衡運動・水平運動の研究をするようになったのか 徐知伶
- ヒューマンライツ 284 (部落解放・人権研究所刊, 2011.11) : 525円
 書評 平沢安政編著『人権教育と市民力 「生きる力」をデザインする』 寺町晋哉
- ひょうご部落解放 142 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2011.9) : 700円
 特集 1 東日本大震災～私たちに何ができるのか～
 特集 2 第25回人権啓発研究集会 in 姫路 3
- 兵庫県S市における部落差別の実態～「市民意識調査」結果を通して～ 江嶋修作, 大久保陽一 / 白革鞆しの歴史～高田家文書から～ 永瀬康博 / 被差別部落が担ってきた伝統文化～西誓寺文書から見えてきたこと～ 今井進, 植村満
- ルポ・祭礼差別 下 平野次郎
- 広島修大論集 99号 (広島修道大学学術交流センター刊, 2011.9)
- 今・ここの関係性と向き合うことから～「いじめ学習」における生徒たちの“リアル”と葛藤～ 大庭宣尊
- 部落解放 653号 (解放出版社刊, 2011.11) : 630円
 特集 インターネットと差別
- 対談 生きるための言葉を探しつづける 在日とハンセン病問題との出会い 高史明, 姜信子
- 門田秀夫を悼む 林力
 「大逆事件」唯一の女性犠牲者 菅野須賀子の「針文字」展示 辻本雄一
- まちかどの芸能史 10 伊勢大神楽 村上紀夫

京都上賀茂のすzuki栽培と朝鮮人 2 高野昭雄

こるむ 7号 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2011.11)

朝鮮学校の歴史 6 処遇改善運動による幾多の成果 金東鶴

在日朝鮮人史研究 41 (在日朝鮮人運動史研究会編, 2011.10) : 2,400円

在日一世の漢詩人たち 崔碩義

戦前期大阪における朝鮮人医療問題 塚崎昌之

足尾銅山・朝鮮人戦時動員の企業責任 村上安正氏の批判に答える 古庄正

朝鮮学校教育の「日常」からの性格検討 1950年代後半における朝鮮学校教員に求められた「教員性」の分析から 呉永鎬

在日朝鮮人社会における「統一」論 民団系在日朝鮮人の韓国民民主化運動団体を中心に 趙基銀

朝鮮における解放前一年史 戦時労働動員を中心に 樋口雄一

雑学 終刊号 (下之庄歴史研究会刊, 2011.10)

雑学バックナンバー [目次]

下之庄歴史研究会及び会員関係出版物

下之庄歴史研究会のあゆみ 33年6ヵ月

狭山差別裁判 426号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2010.9) : 300円

野間宏と寺尾判決 5 庭山英雄

試行社通信 302号 (八木晃介刊, 2011.12)

輝いていたムラの人 自己内外対話 41 八木晃介

人権21 調査と研究 215 (おかやま人権研究センター刊, 2011.12) : 650円

岡映と国民融合論 手島一雄

人権と部落問題 821 (部落問題研究所刊, 2011.10) : 630円

特集 同和行政の終結

長野県・御代田町 同和事業を廃止して「いのち」を育み守る町へ 茂木祐司 / 和歌山県 「同和行政の終結」に関する調査からみた状況 竹田政信 / 兵庫県 「人権 (同和) 行政」の実態調査結果と分析 村上保 / 岡山県 「同和」行政のその後の状況 吉岡昇

現地報告 大阪府 私たちの暮らす地域は見せ物ではありません 大阪人権博物館 (リバティおおさか) におもう 谷口正暁

文芸の散歩道 同人誌『処女地』(島崎藤村編)の作品 長坂きくじ「ある女の手紙」 川端俊英

兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 7 会費制の結婚式 南野昭雄

人権と部落問題 822 (部落問題研究所刊, 2011.11) : 630円

特集 現代の貧困と生きる権利

文芸の散歩道 藤澤桓夫『漁夫』 岩手県山田町の屈しない漁民の闘い 秦重雄

兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 8 京交書記長～市議補選初落選 南野昭雄

人権と部落問題 823 (部落問題研究所刊, 2011.12) : 630円

特集 「日の丸・君が代」問題

文芸の散歩道 安岡章太郎著 戯曲『プリストピルの午後』は部落問題関係作品か 桑原律

兎と亀の人生 名もなく貧しくともひたすらに 9 ーから出直し 南野昭雄

じんけんぶんかまちづくり 33 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2011.12)

「出自暴き」がまき散らした差別は... 佐々木寛治

季刊人権問題 365 (兵庫人権問題研究所刊, 2011.10) : 700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 2 八鹿高校の先生の救出をひたすら求めて 安武ひろ子

振興会通信 100号 (同和教育振興会刊, 2011.9)

同朋運動史の窓 9 左右田昌幸

月刊スティグマ 183 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.10) : 500円

連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 鎌田行平 月刊スティグマ 184 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.11) : 500円

連載 アニメ「もののけ姫」と日本の差別問題 6 「もののけ姫」と網野歴史学 鎌田行平

月刊スティグマ 185 (千葉県人権啓発センター刊, 2011.12) : 500円

橋下前大阪府知事に対する「週刊新潮」「週刊文春」の記事について 鎌田行平

月刊地域と人権 331 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.10) : 350円

人権侵害救済法案をめぐる動向と課題 新井直樹

地域と人権 1105号 (全国地域人権運動総連合刊, 2011.10.15) : 150円

国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 16 丹波正史

地域と人権京都 606号 (京都地域人権運動連合会刊, 2011.10.1) : 150円

京都市「総点検委員会」後の同和行政・同和教育の現状 2 藤谷剛

落問題研究資料センター刊, 2011.10)

本の紹介

大東仁著『大逆の僧 高木顕明の真実 真宗僧侶と大逆事件』 駒井忠之/シェルビー・スティール著『白い罪 公民権運動はなぜ敗北したか』 住田一郎/黒川みどり著『描かれた被差別部落 映画の中の自画像と他者像』 石元清英

収集逐次刊行物目次(2011年7月~9月受入)

グローブ 67(世界人権問題研究センター刊, 2011.10)

寺社への墨書は落書きだったか 歴史的なものの見方とは 野地秀俊

著書『ルポ 在日外国人』の反響 高賛侑

人権の“館” 長島愛生園歴史館

クロノス 33(京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2011.11)

脇田晴子名誉教授文化勲章受章記念講演 私の歩んだ道 脇田晴子

藝能史研究 193(藝能史研究会刊, 2011.4):1,800円

乗牛風流と鶏鉾についての考察 河内将芳

研究紀要 在日外国人教育 創刊号(全国在日外国人教育研究所刊, 2005.8):600円

被爆者はどこにいても被爆者 在外被爆者裁判を支援しつつ 豊永恵三郎

夜間中学と在日外国人 吉川弘

仏教界の差別雑感 正木峯夫

第10回兵庫県在日外国人教育研究集会第5分科会パネルディスカッション「震災復興10年・外国人教育10年の歩み」

日韓交流の要 韓国私立南旨高校と日本国尼崎市立尼崎高校との今後の交流の在り方への提言 藤原史朗

外国から来た生徒の学習上の困難 「家庭科」の学習支援を通して 趙衛国

研究紀要 在日外国人教育 2号(全国在日外国人教育研究所刊, 2009.8):600円

補章『育ち行く者たちと共に』 南果歩のカミングアウトに寄せて 藤原史朗

「韓流」と「拉致」に挟撃される「在日」 呉徳洙

1910年と石川啄木 「大逆事件」「韓国併合」百年 金井英樹

竹中彰元・反戦と仏教 正木峯夫

「田母神論文」を検証する 尹達世

「ピースボート」なかなかユニークな船旅でした 松谷操 わたしの朝文研 藤川正夫

もっと夜間中学のことを知ってほしい すべての都道府県に夜間中学を 吉川弘

在日外国人教育実践で留意したいこと 子どもたちのアイデンティティ確立をどう支援するか 小西和治

研究紀要 在日外国人教育 3号(全国在日外国人教育研究所刊, 2011.8):600円

教育免許状 裏面但し書「日本帝国臣民ニアラサリシ者」について 藤原史朗

映画で考える[韓国併合100年] 呉徳洙

在日コリアンの誰もが民族名で生活できるための一考察 尹チョジャ

民族差別を超える エスペラント運動史序説 金井英樹

『高校日本史教科書』を検証する これまでのこと、これからのこと 阪上史子

東北ボランティア行脚 藤川正夫

「ピースボート」なかなかユニークな船旅でした(続) 松谷操

サハリン残留コリアンの歴史と帰還運動 小西和治

独善的教育長の横暴《公立夜間中学にかけられた攻撃》 吉川弘

国際人権ひろば 99(アジア・太平洋人権情報センター刊, 2011.9):350円

特集 平和への権利

こべる 223(こべる刊行会刊, 2011.10):300円

ひろば 144 生きのびる記憶 虫賀宗博

尼崎だより 37 震災復興とは新たな暮らしを創造すること 中村大蔵

いのちを生きる 44 メダカの夏 長谷川洋子

花とマグマ 絵と詩 森永都子

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 224(こべる刊行会刊, 2011.11):300円

ひろば145 『坊つちやん』の喧嘩 旧制中学校と師範学校の対立を考える 野町均

四日市から 21 東日本大震災と向き合う女性たち 坂倉加代子

いのちを生きる 45 葬られた金網 長谷川洋子

花とマグマ 絵と詩 森永都子

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 225(こべる刊行会刊, 2011.12):300円

ひろば146 イメージが変われば意識が変わる 山田晏弘 尼崎だより 38 遥かなるアイヌの響き “けせんぬま”

に惹かれて 中村大蔵

いのちを生きる 46 ナディアからの贈り物 長谷川洋子

花とマグマ 絵と詩 森永都子

濃水飛山記 藤田敬一

こりあんコミュニティ研究会通信 10(こりあんコミュニティ研究会刊, 2011.10)

解放新聞 2541号（解放新聞社刊，2011.10.31）：80円
 今月の本
 『西行』（白洲正子著）／『父の戦地』（北原亞以子著）
 ／『島国チャイニーズ』（野村進著）
 今週の1冊 『沖縄 アリは象に挑む』（由井晶子著）
 解放新聞 2542号（解放新聞社刊，2011.11.7）：120円
 ぶらくを読む 67 1968年革命から部落解放運動の明日へ
 湧水野亮輔
 解放新聞 2543号（解放新聞社刊，2011.11.14）：80円
 解放の文学 67 地球が主役の時代に 小松左京『日本沈没』 音谷健郎
 解放新聞 2544号（解放新聞社刊，2011.11.21）：80円
 山口公博が読む今月の本
 『はじめての老い さいごの老い』（立松和平著）／
 『調べる技術・書く技術』（野村進著）／『雑草と楽しむ庭づくり』（ひきちガーデンサービス著）
 今週の1冊 『希望は絶望のど真ん中に』（むのたけじ著）
 解放新聞 2545号（解放新聞社刊，2011.11.28）：80円
 週刊新潮、文春に抗議文
 今週の1冊 『ニッポンの国境』（西牟田靖著）
 解放新聞 2546号（解放新聞社刊，2011.12.5）：120円
 ぶらくを読む 68 部落史での紀州の位置 藤本清二郎・
 牢番頭文書刊行事業によせて 湧水野亮輔
 解放新聞 2547号（解放新聞社刊，2011.12.12）：80円
 なぜ、いま親鸞なのか 村上紀夫
 解放新聞大阪版 1894号（解放新聞社大阪支局刊，2011.11.7）：70円
 新潮、文春に抗議 橋下知事の「出自」めぐる記事で
 解放新聞大阪版 1896号（解放新聞社大阪支局刊，2011.11.21）：70円
 大阪における今後の部落解放運動の総合的展開について
 各作業部会での議論を受けての素案 1
 解放新聞大阪版 1897号（解放新聞社大阪支局刊，2011.11.28）：70円
 大阪における今後の部落解放運動の総合的展開について
 各作業部会での議論を受けての素案 2
 解放新聞大阪版 1898号（解放新聞社大阪支局刊，2011.12.5）：70円
 大阪における今後の部落解放運動の総合的展開について
 各作業部会での議論を受けての素案 3
 解放新聞大阪版 1899号（解放新聞社大阪支局刊，2011.12.12）：70円
 新潮・文春両誌が回答
 解放新聞京都版 899号（解放新聞社京都支局刊，2011.10.1）：70円

この人に聞く 3 杉末 行政交渉で道を広げた
 解放新聞京都版 900号（解放新聞社京都支局刊，2011.10.10）：70円
 この人に聞く 4 杉末 学校現場や結婚問題で差別
 解放新聞京都市版 240号（部落解放同盟京都市協議会刊，2011.10）：150円
 水平社90年に思う～部落解放運動往来～ 福田春三郎さん
 解放新聞京都市版 241号（部落解放同盟京都市協議会刊，2011.11）：150円
 水平社90年に思う～部落解放運動往来～ 羽室武さん
 解放新聞京都市版 242号（部落解放同盟京都市協議会刊，2011.12.1）：150円
 水平社90年に思う～部落解放運動往来～ 松井珍男子さん（朝田教育財団理事長）
 解放新聞奈良県版 944号（解放新聞社奈良支局刊，2011.9.25）：50円
 県内6部落の戸数等の歴史的变化から見えるもの 6
 解放新聞奈良県版 945号（解放新聞社奈良支局刊，2011.10.10）：50円
 川東大了の差別街宣事件糾弾闘争方針 部落解放同盟奈良県連合会
 カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター
 たより 26（カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊，2011.10）
 第3回対話集会 『忌避意識』 両側から超える営み 3 講師：山下力，住田一郎
 インタビュー カトリック学校の人権教育
 かわとはきもの 157（東京都立皮革技術センター台東支所刊，2011.9）
 靴の歴史散歩 102 稲川實
 皮革関連統計資料
 関西大学人権問題研究室紀要 62号（関西大学人権問題研究室刊，2011.8）
 特集：国際シンポジウム 歴史認識と歴史教育2 記憶の継承と歴史教育の課題
 講演1 姜龍範 「中国朝鮮族の視覚から見た日本の歴史教科書改訂問題」／講演2 河棕文 「日本軍「慰安婦」問題と韓国の「ニューライト」」／講演3 マルティン・リーパッハ 「時代の証言の後にくるもの メディアによる記憶と歴史認識」
 [京都女子大学宗教・文化研究所] 研究紀要 24号（京都女子大学宗教・文化研究所刊，2011.3）
 戦前期京都市における都市下層の職業構成 1 高野昭雄
 京都部落問題研究資料センター通信 25号（京都部

収集逐次刊行物目次 (2011年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 明日を拓く 90 (東日本部落解放研究所刊, 2011.3) : 1.050円
 特集 あらためて、差別をなくし、11社会を変える運動を手探りする
 座談会 1 狭山事件・狭山闘争とは 部落の「内部」と「外部」の連携による反差別闘争 / 座談会 2 部落におけるNPO・法人の取り組み 部落の「内部」と「外部」の交流を实践する
 本の紹介 戦後アジアのなかのジェンダー・部落問題への問題提起に立ち会う (上) 大越愛子/井桁碧編著 『現代フェミニズムのエシックス』, 友常勉著 『脱構成的叛乱 吉本隆明、中上健次、ジャ・ジャンクー』 吉田勉
 IMADR-JC通信 168 (反差別国際運動日本委員会刊, 2011.9) : 750円
 特集 世界の反差別国際運動
 ウィングスきょうと 106 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2011.10)
 図書情報室新刊案内
 『日本型近代家族』(千田有紀著) / 『放送ウーマンのいま 厳しくて面白いこの世界』(日本女性放送者懇談会編)
 ウィングスきょうと 107 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2011.12)
 図書情報室新刊案内
 『54歳のハローワーク+アラウンド定年の就活ハンドブック』(吉川紀子・竹内康代著) / 『女性と仕事ジャーナル 2011』(女性と仕事研究所編)
 大阪人権博物館紀要 13号 (大阪人権博物館刊, 2011.3)
 韓国歴史ドラマの魅力を探る試論的考察 朝治武
 シンポジウム 江戸時代の道頓堀と千日前 長吏・三味聖・刑場 高久智広, 木下光生, 村上紀夫
 報告 「着る」ことから広がる理解 大阪人権博物館の体験コーナー「いろんな衣装を着てみよう」について 文公輝
 解放教育 528 (解放教育研究所編, 2011.11) : 770円
 特集 いま「新しい教師たち」に伝えたいこと
 解放教育 529 (解放教育研究所編, 2011.12) : 770円
 特集 人権と教育をめぐる現在 世界と日本における人権教育の動向
 対談 いまの日本における人権教育課題は何か? 阿久澤麻理子, 森実
 解放新聞 2536号 (解放新聞社刊, 2011.9.26) : 80円
 今週の1冊 『「生き場」を探す日本人』(下川裕治著)
 原発体制をこえて人間の未来へ 1 鎌田慧
 解放新聞 2537号 (解放新聞社刊, 2011.10.3) : 120円
 今週の1冊 『沖縄と米軍基地』(前泊博盛著)
 原発体制をこえて人間の未来へ 2 鎌田慧
 ぶらくを読む 66 1968年世界「革命」の中の日本と部落問題 湧水野亮輔
 解放新聞 2538号 (解放新聞社刊, 2011.10.10) : 80円
 今週の1冊 『ルポ下北核半島 原発と基地と人々』(鎌田慧・斉藤光政著)
 解放新聞 2540号 (解放新聞社刊, 2011.10.24) : 80円
 解放の文学 66 「戦場」が蓄積した島 大城立裕 『普天間よ』 音谷健郎
 今週の1冊 『東電の核惨事』(天笠啓祐著)

事務局よりお知らせ

11月・12月に開催しました部落史連続講座PART2の報告を掲載しています。簡単にまとめたものですので、詳しくは3月末に発行予定の『2011年度部落史連続講座講演録』をご参照ください。ご希望の方は資料センターまでメール・電話・FAXでご連絡ください。

次年度も、春と秋に6回の講座を予定しています。詳細が決まり次第、メールマガジン・ホームページ等でお知らせします。是非ふるってご参加ください。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分